

石川県現代俳句協会会報

第31号
2023年
(令和5年)
2月20日 発行

○その他の作品

五線符から食み出す風花双の手に

村田 巴

探梅や会ひたき人を目で探す 松本詩葉子
暮れてなほ我がゆく道に雪明り 藤野 忠行

落款の見つめ返してくる余寒 平林 啓子
鳥帰る絶滅危惧種また増えて 伊達 文葉

昨日より今日のふくらみさくらの芽

日 時 令和4年3月6日(日) 13時
場 所 金沢市・石川県女性センター
令和3年度事業報告、決算報告及び令和4年度事業計画、予算を審議、承認された。

総会終了後、事前投句53句による句会を開催。

当日参加者13名。

○平林啓子の十句選

梅白し体温計をペン立てに 関戸美智子
抱へくる切り口新し春の梢 森岡 一子
疫病み世の遊びごろに風車 木村 寛伸
ちりめん雑魚人体淡く海になる 松井麻容子
カトレアや定年という落し物 梅木 俊平
ジーンズの深いポケット春を待つ

関戸美智子

祝

句集出版 令和四年三月一日発行

(館百合子記)

一湾へ風筋みせて春一番 館 百合子
昆虫館みたいな春の乳児室 大沢 輝一
春待つやクローゼットのハイヒール

棚野 智栄

春空へインコ逃した手の湿り

野田悠美子

昨日より花見が出来る窓よ窓

石川県現代俳句協会総会

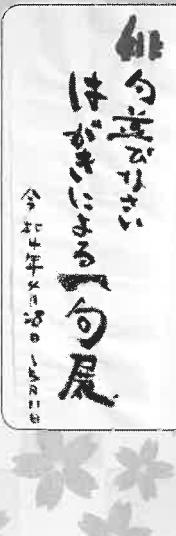


令和4年3月6日 石川県女性センター

令和4年度 定期総会開催

第11回 俳句並びなさい

「はがきによる一句展」



一句展に寄せて

大沢 輝一

第11回春の石川県現代俳句協会恒例行事である“俳句並びなさい”「はがきによる一句展」が、石川県女性センターアートギャラリーで、令和4年4月28日～5月11日の間行われた。

塗絵・切絵・貼絵等作品の工夫は勿論だが、きれいにハガキに収まっている俳句。力一ぱい自分で主張する作品。字の上手下手は論外書いてある俳句を見て欲しい――。という具合で個性で満ち溢れた展示作品。内容濃い展示会だったと思う。

協会会員17名総提出句64句。出展句数は減じたが、そのままの私が現われている作品発表会でした。

一人一句ですが“私の好きな句”をあげさせて頂きます。

小白鳥楽器ケースに仕舞おうか 梅木 俊平
土の香の立ち上がるまで雪を搔く

松本詩葉子

今回初めてじっくりと、作品に触ることができました。句のみのもの、俳画・絵手紙など

フクシマに摘みし日のあり落の臺

日のあたる薪の小口や放哉忌 浅田 正文
やわらかい言葉のひとつ白紫陽花 亀田 蒼石

春暁の眠りのなかに水の音 鶴見 美智子
朧月漁港は淡きはがね色 小崎 淳子

余花残花昭和さがしの旅に出る 笹次 和子
学校の窓は百枚夏休み 村田 巴

朝の窓木立かくして花の雲 田中 一良
提案はさくら餅の葉たべますか 阿木よう子

玉入れ合戦源平桃の乱 木村 寛伸
白無垢の連峰のぞく種おろし 太田 淳子

声光るかけあしでゆく花の門 森田 香月
ドーナツをくぐりぬけたる春の風 平林 啓子

たんぽぽや聖石佛を照らしあり 藤井智穂子
花ざかり本日人間休みます 大沢 輝一

一人一句ですが“私の好きな句”をあげさせたが、そのままの私が現われている作品発表会でした。

ドーナツをくぐりぬけたる春の風

参加されなかつた方方は次回はぜひとも。
頂きます。

藤井智穂子

はがきによる一句展

令和4年第11回「はがきによる一句展」が、

石川県女性センターにて4月28日より5月11日まで開催される事になり、皆さまの自信作品が

64句集り、それを会長はじめ亀田さん、村田巴さんが朝早くからどのように配置して飾ろうか、頭を悩ませながら進め、最後に瓢箪から駒が出

多種多様のそれらに心躍りました。

猫の恋夫の窓みの寝椅子かな 小崎 淳子

どんでん返しの壁半開き梅雨晴間

村田 巴

紋白蝶和紙に包んでみたくなる 関戸 美智子

花ざかり本日人間休みます 大沢 輝一

晩年の視野に父揺れ芒ゆれ 鶴見 美智子

日のあたる薪の小口や放哉忌 亀田 蒼石

夫の窓みの深浅の発見のよろしさ 壁半開き

が良い、想像を掻き立てさせられます。和紙か

ら、生きている蝶を包みたくなる情的過程に内

得。人間休みますの作者、花あるいは風と化し

たのであろう。晩年の視野、良いフレーズです。

放哉忌の選択のよろしさ、整然と積まれた木口

と口語自由律の放哉との対比は出色です。他に

も好きなが句ありましたが、紙面上割愛させて

ると言われるよう、素敵な瓢箪を飾り締めました。皆さま奮ってお出かけくださいね。

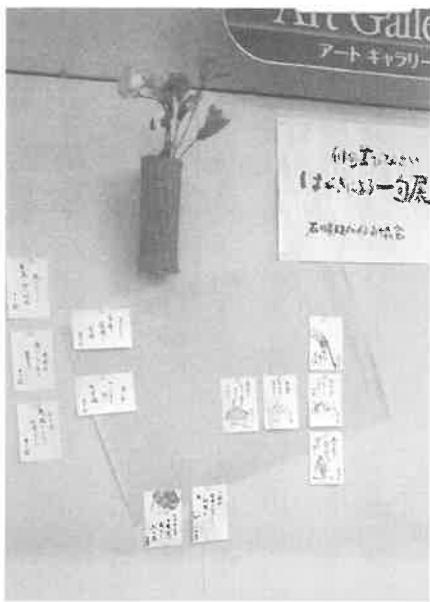
◆俳句並びなさい “はがきによる一句展” の
搬入にかかわって 村田 巴

令和4年4月28日～5月11日迄、県女性セン

ター一階ギャラリーに於て開催。

開催当日、会長をはじめ会員数名で飾り付けを行う。ロビーの壁面と直角にパネルを使

い、参加17名、64句を作ることに展示了。内容は初冬～春に向かう作品。先ず、レイアウトをあれこれ検討し、クラフト紙を台紙として使用、「アンバランスも又いいか」などと作業。句に俳画を添え、流石と感心する。絵手紙ふうに画いた微笑ましい絵、瓢箪や藤蔓花瓶等を飾り、春の花を添え、展示を引立て華やかになつた。後は来場を待つばかり。



吟行会

★夏季★

日 時 令和4年7月10日（日）

吟行地 金沢駅とその周辺

句会場 石川県女性センター 参加12名

—— 作品抄 ——

炎天がビルの谷間にひつかかる 松本詩葉子

ビルの根を走る蟻蟻お父さん 大沢 輝一

立葵電車加速の音が好き 梅木 俊平

朝涼や貸自転車のライム色 平林 啓子

もてなさる氷菓かさねの包み紙 笹次 和子

東口出でて人々な熱帯魚 木村 寛伸

噴水は怒りの高さ戦火なお 館 百合子

あ、あ、あ、あつ、あつ、あつ、暑い鼓門 浅田 正文

和菓子屋の藍のれんに入るエトランゼ 村田 巴

改札をぬけハイタツチの帰省の子 薮野 忠行

地下道は七夕飾り未来へと 藤井智穂子

鼓門たしかに蝉が来てています 関戸美智子

★秋季★

日 時 令和4年11月13日（土）

吟行地 金沢市民芸術村（金沢市大和町）

句会場 石川県女性センター 参加10名

吟行記 (1) ■

毎次 和子

ウイズコロナの流れの中での吟行会。やわらかな雲が浮かぶ青空のもと、日差しにも恵まれ、ことのほか暖かい。今を盛りの紅葉に心奪われる。

芸術村の芝生ではグランドゴルフに興じる高齢者。ボールをける少年たち。親子連れ。時

折、赤煉瓦の建物の後ろを貨物列車がよぎる。

そのうち、柔らかな雨が降りだし、句材は最高潮。

懐手して職人の眼となりぬ 平林 啓子

冬そつと人の背そばに乗つかつて 大沢 輝一

秋の雨レンガの傷がやわらかい 関戸美智子

不器用な男の一步初しぐれ 木村 寛伸

芸術の秋を彩る赤煉瓦 松本詩葉子

曇天にひときわ高く冬紅葉 浅田 正文

そぼ降るは鷹居る梢時鐘また 村田 巴

古民家は装い新た冬薔薇 藤井智穂子

走り来る枯葉に老いに立ち向かう 鶴の小春の雨に翔ち騒ぐ 笹次 和子

❖

*二次句会（席題〈枯・明・音〉）

大根引き明るさだけが取り柄です

明日明後日一日一日日短か

平林 啓子

判決は明快ならず山眠る

松本詩葉子

天体シヨウの後は明るき月の空

浅田 正文

晴れのち雨明日は狐のお引越し

木村 寛伸

枯すすき風のたんびに裏声す

大沢 輝一

高みから明日ヘジャンプ秋日和

館 百合子

風を来る大きな枯葉わたくしす

関戸美智子

袖着て明暗分ける初しぐれ

藤井智穂子

夕づきて枯葉走るは獣めく

笛次 和子

吟行記(2)

平林 啓子

十一月は秋・冬両方が混ざり合う月。微妙な季感をどう詠もう、皆はどう詠むのか楽しみにしつつ臨む。

吟行の面白さは同じ景を見ていながらも味わいの異なる句が出てくる所であろう。

秋の雨レンガの傷がやわらかい

芸術の秋を彩る赤レンガ

どちらの句も対象物は同じである。前句のレンガは傷→やわらかと続き人の気配を感じる。

後句のレンガは建築物となり美しい風景画を見ているようである。

寄るか引くか。対象物との距離感を学ぶ。

秋の雨レンガの傷がやわらかい
冬そっと人の背に乗つかつて
人集ふことが芸術秋広場

関戸美智子

塗り椀にうかぶ苔の大きくて
野地蔵をわが影に容れ鶴聞く

松本詩葉子

不器用な男の一歩初しぐれ

木村 寛伸

ひびのある人魚の腕や黄葉降る

木村 寛伸

遠近の枯葉踏む音警護員

館 百合子

烏とび木の葉がとんで枯葉とゞ

木村 寛伸

濡れて来る郵便夫落葉付け

木村 寛伸

古民家は装い新た冬薔薇

木村 寛伸

紡績工場跡地時雨を紡ぎけり

木村 寛伸

山門を開けて木枯迎へ入れ

木村 寛伸

ふるきよきときの話でおでん酒

木村 寛伸

蜜柑一個握りふるさと大股に

木村 寛伸

したたかに老い火消壺あるくらし

木村 寛伸

足さばき団扇さばきも笛のなか

木村 寛伸

飯田 順子

蜜柑一個握りふるさと大股に

木村 寛伸

春寒し群青の間も松の間も

木村 寛伸

肩で弾くコントラバスや汗光る

木村 寛伸

薔薇の門くぐりて白き予約席

木村 寛伸

蟻の列女王様はもう居ない

木村 寛伸

八月忌便器の横に核ボタン

木村 寛伸

譜面無きパンデミック晩夏のジャズ

木村 寛伸

花盛り本日人間休みます

木村 寛伸

大沢 輝一

木村 寛伸

銀杏大樹兄サが降りてきそうな日

木村 寛伸

木村 寛伸

寒落暉ぱりんと割れた音がする

木村 寛伸

木村 寛伸

鹿鳴くや奈良の絵地図の夕湿り

木村 寛伸

木村 寛伸

亀田 蒼石

木村 寛伸

同室の人みな寝落つ後の月

木村 寛伸

丈六の静かな暮色おけら鳴く

腕まくり朝は始まる柿若葉 峰谷 清広

在の主宰は初代主宰・中西舗土の長子・石松氏である。

曠夜や思ひだされずひと日過ぐ 笠松 香代

生きるという仕事に戻る昼寝覚 長き夜や言葉の宇宙膨らんで

参道の新樹を傘に長居して あの辺り降つてぬさうや夕立雲

地の底の声出して鳴く墓 館 百合子

中西 石松

残照の渦に降立つ鴨の数 井村 芳子

いつ死んでもいいなんてウソ柿若葉 冬來たるぽつんぽつんと未明の灯

小白鳥樂器ケースに仕舞おうか 梅木 俊平

独り居て耳門をひらく虫の夜 小西 久子

いつ死んでもいいなんてウソ柿若葉

花嫁の投げしブーケか白鳥は 白鳥の浮寝詩人の姿なり

白山の裾までが見え鮎築場 田中 清子

冬來たるぽつんぽつんと未明の灯

試着室の鏡の奥にある残暑 田中 清子

國二つ望む明神屋の虫 平手ふじえ

形見となる絵手紙一枚戻り梅雨 村田 巴

散り初めし枝垂桜や恋心地 田中 一良

ゆっくりと腰を伸ばせば秋の暮 中西 石松

真つ赤な薔薇は一本でよし夫退院

寄り添いて何も語らず杜若 何気なく見上げています月朧

残照の渦に降立つ鴨の数 井村 芳子

平和の句に赤のマーカー夏が逝く

雪解や車椅子には母のいて 棚野 智栄

獨かとは昔の職場鰯雲 光陰や百にはみたぬ梅を干す

夏草や村人避けて仮帰宅 浅田 正文

補助輪をはずして弾む初桜 ひと群れの県外ことば神無月

父の背の小さくなりぬ冬の星 葡萄食ふ故郷の記憶舌の上

除染だと！白すみれ踏み重機行く

終日を風と話して捨案山子 桃妖の墓への標おけら鳴く

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

原発を新設だとさ狂い花

雪吊や猫の手となり縄捌き 雪吊や猫の手となり縄捌き

江尻外茂治 笠松 香代

寺の猫落ちぬ椿を知つて いる 平林 啓子

横丁の三寒四温こんぺいとう 関戸美智子

笠松 香代 山下久美子

でで虫よ住所地球と書く未來

花瓶ごと水ごと割れる夏の夕 未完成のまま五月の美化委員

笠松 香代 永島 正枝

目薬の体液となり夜の長し

横丁の三寒四温こんぺいとう 関戸美智子

瀬東千恵子

証書の友禅流し秋收め

花瓶ごと水ごと割れる夏の夕

瀬東千恵子

古民家は外装新た冬薔薇

未完成のまま五月の美化委員

瀬東千恵子

小さき嘘風花に乗せ大となり

花瓶ごと水ごと割れる夏の夕

瀬東千恵子

雪垣結社は創刊以来六百号となり、昨年十月、

創立五十周年を祝つた。北陸で立ち上げた俳誌

としてはただ一誌で、前田普羅を師系とす。現

・雪垣
雪垣結社は創刊以来六百号となり、昨年十月、

創立五十周年を祝つた。北陸で立ち上げた俳誌

としてはただ一誌で、前田普羅を師系とす。現

藤井智穂子

平林 啓子

浅田 正文

巴

村田 巴

巴

巴

巴

巴

巴

巴

峰谷 清広

在の主宰は初代主宰・中西舗土の長子・石松氏

である。

ゆっくりと腰を伸ばせば秋の暮 中西 石松

残照の渦に降立つ鴨の数 井村 芳子

独り居て耳門をひらく虫の夜 小西 久子

白山の裾までが見え鮎築場 森 讓治

試着室の鏡の奥にある残暑 田中 清子

国二つ望む明神屋の虫 平手ふじえ

原爆忌市電のレール乱反射 高岡 幸子

遙かとは昔の職場鰯雲 光陰や百にはみたぬ梅を干す

南北 邦夫 笹次 和子

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

葡萄食ふ故郷の記憶舌の上 谷川 俊

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

雪解や車椅子には母のいて 棚野 智栄

獨かとは昔の職場鰯雲 光陰や百にはみたぬ梅を干す

南北 邦夫 笹次 和子

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

補助輪をはずして弾む初桜 ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

父の背の小さくなりぬ冬の星 葡萄食ふ故郷の記憶舌の上

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

桃妖の墓への標おけら鳴く 桃妖の墓への標おけら鳴く

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

逆光に耳透く少年ぱつた跳ぶ 桃妖の墓への標おけら鳴く

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

雪吊や猫の手となり縄捌き 雪吊や猫の手となり縄捌き

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

雪吊や猫の手となり縄捌き 雪吊や猫の手となり縄捌き

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

横丁の三寒四温こんぺいとう 横丁の三寒四温こんぺいとう

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

花瓶ごと水ごと割れる夏の夕 花瓶ごと水ごと割れる夏の夕

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

未完成のまま五月の美化委員 未完成のまま五月の美化委員

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

花瓶ごと水ごと割れる夏の夕 花瓶ごと水ごと割れる夏の夕

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

横丁の三寒四温こんぺいとう 横丁の三寒四温こんぺいとう

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

花瓶ごと水ごと割れる夏の夕 花瓶ごと水ごと割れる夏の夕

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

横丁の三寒四温こんぺいとう 横丁の三寒四温こんぺいとう

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

花瓶ごと水ごと割れる夏の夕 花瓶ごと水ごと割れる夏の夕

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

横丁の三寒四温こんぺいとう 横丁の三寒四温こんぺいとう

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

花瓶ごと水ごと割れる夏の夕 花瓶ごと水ごと割れる夏の夕

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

花瓶ごと水ごと割れる夏の夕 花瓶ごと水ごと割れる夏の夕

ひと群れの県外ことば神無月 江尻外茂治

(笛次和子 記)

句会便り

・狼

俳句会

・雪垣

雪垣結社は創刊以来六百号となり、昨年十月、

創立五十周年を祝つた。北陸で立ち上げた俳誌

としてはただ一誌で、前田普羅を師系とす。現

・雪垣

</

